



論を読んだ。本書でもとりあげられている河野健二・飯沼二郎編『世界資本主義の歴史構造』にまとめられた研究会である。そこでくりかえしおこなわれた議論も世界資本主義と国民経済をめぐるものであり、その問題意識は一國資本主義の形成における外的要因と内的要因といった比較経済史的な問題設定をいかにしてこえるか、一國資本主義から出発するのでなく、それを条件づけているものの総体を一つの構造として（単なる外的要因ということではなく）把握することであった。その後、評者はこうした議論から遠ざかってしまったが、本書の序章を読みながら思いかえしてみると、この問題にさらに一步ふみこむためには、金本位制とそれにもとづく国際貿易・決済機構、国際金融機構などの世界資本主義による決定のメカニズムの実態を、各国の再生産・資本蓄積に関連づけて分析すること、それにもとづいてその決定の重層的性格を具体的様相においてとらえることが必要だったように思われる。金本位制などの機構は世界資本主義の実体的基礎をなしており、その認識は、世界資本主義の構造ないし構造化の具体的解明に役立ちうるであろう。著者はこの点を無視しておらず、重商主義段階におけるアントワープからアムステルダムへの国際商業の中心の移動、遠隔地貿易のための金融・信用制度の展開にふれている。しかしこれらの機構が本格的に作動する、それ以後の時期については、これらに關説するところの少ないのは、いささか腑におかない感じがする。これらの機構の分析が、中心・半周縁・周縁の関係を地域間あるいは二國間の関係としてでなく、世界資本主義の全体構造のなかでとらえることに寄与しえただろうと思われるだけに、いっそうそう感じられる。

中心・半周縁・周縁の關係についていえば、中心は他の地域を「取寄」支配するだけでなく、それらからの規定も受けている。中心と半周縁・周縁の交易は兩者にとって不可欠の存立条件となっており、そのかぎりで中心の社会経済構造にたいして一定の規定作用を及ぼすであろう。イギリスは、自己完結的な生産・流通の枠組をとりはずすことよって世界資本主義の基軸となりえたのであり、その意味では他の諸地域から逆規定を受けている。周縁の中心にたいする政治的抵抗は重要な契機であるけれども、周縁の中心にたいする規定作用はそれだけにとどまらないだろう。著者はこの点を見落としているわけではない。重商主義段階の半周縁・周縁・外周縁について論じた部分（六五―七八ページ）、産業革命段階のメキシコについての叙述（八一―一八六ページ）、さらに終章がこの点にふれており、これまで論じられることの少なかった地域について貴重な認識をもたらしている。けれども序章で世界体制のもとでの諸地域の「複合的な相互関係」が強調されているほどには、周縁の中心にたいする規定作用は見えてこない。序章の提起にくらべて、本論が意外に西欧中心だという印象を受けたのは、評者だけだろうか。

戦後歴史学にたいする批判がより鮮明にうちだされるのは、鎖国のもう一方の端である「民衆運動」にかんしてである。著者はいう。戦後歴史学は社会構成体の発展を基本的枠組としていたから、民衆運動をもつばら社会構成体の内的矛盾の存在証明として、階級闘争として論じてきた。その結果、民衆運動の研究は、一方でその経済的原因の分析と暴動・一揆の叙述に還元され、他方で

は、民衆運動の評価がもっぱら生産様式との関連でおこなわれることになった。要するに民衆運動それ自体の分析がさまたげられてきたのである。このような「経済主義」「客観主義」にたいして、「主体性」を問う立場から批判がなされてきた。しかし「経済的な客観的条件と運動の具体的叙述とを結合する理論と方法を欠如する限り、「主体性」の強調は観念主義におちいらざるをえないし、あるいは、いたずらに文学的に叙述された微細な事実を「主体性」にとりちがえる結果になる」(二二一ページ)。

それについて著者は、経済的条件と民衆運動を結合するものとして、民衆の社会的結合関係とそれにもとづく日常的な生活意識・習慣をとりあげる。民衆運動を生産関係や経済的な階級関係よりも文化をもふくむ社会関係との関連でとらえ、それを国家構造に結びつけた点に、本書の特色がある。「国家について論じるには、まずその社会に住む人々の第一次的な社会関係から見る必要がある。国家とは常に所与の社会構造(第一次的社会関係)を前提としてこれを第二次的社会関係(国家構造)に組織するからである」(八〇ページ)。このような把握によって、民衆世界の独自の論理にふみこむと同時に、ともすれば閉じられたミクロの世界として描かれがちな民衆運動をより広いバースペクティブのもとにおくことに成功しているからである。

こうした視点から、王道とローカルな道、モラル・エコノミー、シャリヴァリ、サロンの結合とサークルの結合などをとりあげながら、民衆の社会的結合関係とその変容を論じた部分は、本書のうちでも生彩にあふれた部分に数えられよう。

ところで著者は、民衆運動について、その破壊的暴力の側面と

同時に、その秩序形成機能を取りあげ、特に後者に注目する。シャリヴァリは暴力的「どんちゃん騒ぎ」だが、それと同時に「村落共同体の伝統的価値体系を永続化し、外部からの解体的要因の侵入にたいして共同体の秩序を擁護する機能的役割を果たした」(二二〇ページ)。食糧暴動も穀物商人やペン屋などにたいする暴力的直接行動であるけれども、その動機は社会的不正への怒りにあり、暴動への参加者の意識では、「暴動は、……社会秩序に対する反抗ではなく、むしろ当局に対する警告であり、その果たすべきことの代執行にほかならなかった。」(二一八ページ)こうして民衆運動は暴力を通して伝統的秩序の維持をはかるが、その正当化を上級の権威に求める傾向にあった。こうして「民衆の世界は、その内部に外的世界の秩序形成の要因を包含していると言えるのであり、特に民衆の世界が解体の脅威にさらされる時、その傾向は強くなった」(二二九ページ)。

このように著者が民衆運動の両義性、とくに秩序形成機能を重視するのは、それを国家的凝集に関係づけるためである。つまり国家の凝集力の強化はヘゲモニーの構築として表われるが、「両義性をもつ民衆運動のエネルギーが、より高次の外部から新しい秩序形成へ組織・嚮導されることによって、ヘゲモニーが構築されるのである」(二三三ページ)。フランス革命期の農民一揆、革命祭典、ローカル次元のさまざまな儀式はこうした役割を担った。

さらに「ジャコバン独裁は、民衆の世界から噴出するエネルギーと結合し、これを嚮導することによって成立するとともに、この自律的世界を全国的・国家的統制下におくことによって、それを変容せしめた」(二六七ページ)といわれる。この説明は、フラ

ンス革命期における國家的凝集と自律的な民衆世界とのパラドクシカルともいふべき關係の説明として、またナショナルリズムの説明として見事であると思う。

しかし民衆の日常的世界の秩序と民衆運動が体现する秩序と國家的凝集が要求する秩序とは、ひとしく秩序といっても、それぞれに性質と次元を異にしているのではないか。民衆運動は日常世界からの切斷によつて民衆運動たりうるのだし、とすればその秩序は日常性のそれとは異なるだろう。また、民衆運動の秩序は國家的凝集の要請するそれと異なっているからこそ、「外部からの嚮導」とか「ヘゲモニーの構築」とかが問題とされるのだろう。

しかし著者においては、これらの間の差異とダイナミックな關係が軽視され、連続的に考えられすぎているように思われる。今一つは、一九世紀の民衆運動をアンシャン・レジーム期の食糧運動やフランス革命期のサン・キュロット運動にひきよせすぎているように見える点である。たとえば著者は、一八四八年六月の蜂起の参加者が、出身階層、組織單位などの点で「サン・キュロット運動と酷似している」(三三四ページ)と述べている。たしかに都市民衆についていえば、手工業的生産に従事する階層が圧倒的に多いし、「都市の社会的構造の連続性」(三二八ページ)も著者の指摘の通りであろう。しかしひとしく民衆運動の自律性、秩序形成機能といつても、伝統的な共同体秩序への復帰を目指し、運動の正当化を上級の權威に求める傾向の強いアンシャン・レジーム期の民衆運動や基本的性格としてはそれを表現している九三―九四年のサン・キュロット運動(二六一―二六三ページ)のそれと、二月革命に収斂してゆく一九世紀の民衆運動のそれとは、質的

な相違があるのではないだろうか。じつさい著者が指摘しているように、一八三〇年以降の労働者運動を担った「開放的」熟練職人は、新しい社会的結合の理念であるアンシャンシオンを原理とすることによつて、職能別・地域別の利害をこえて全労働者の連帯を志向し(三二〇ページ)、「保護者なしにやつてゆける」(三三一ページ)と宣言するのである。たしかにアンシャンシオンの運動は、人民主権の國家にすべての期待をかける共和主義運動と結びついていたし、伝統的価値観を内包していたであろう。しかしそれは、職人組合という社団的組織の解体状況のなかで、新しい組織原理とそれにもとづく自前の中間集団を形成しようとするものであった。たしかにその担い手は職人的熟練労働者だったけれども、彼らの伝統的な結合關係や組織形態を超えてよつとする志向があったことは否定できない。

こうした志向は二月革命期の連合コンボラシオン協会の運動に噴出し、さらに六月蜂起の鎮圧のもとでの共和派への不信、第二帝政前半の沈滞を経るなかで、サンディカリスムへと昇華してゆくであろう。著者は、七月主政期の労働者運動が「労働者自身のなかに自律性の理念を強めた」(三二二ページ)ことをけつして見落としていない。けれども、この点に、前の時代やイギリスなどにくらべて、この時代のフランスの民衆運動の特質があるとすれば、自律性の理念の強化とともに自律性の質の問題はもっと重く見られるべきではないだろうか。

鎖の両端をつなぐ結合の環である國家については、これまでの國家の階級的な性格や政治体制を重視する國家論とは異なつて、

「国家構造」にかかわる問題が重視される。国家構造とは第一次の社会結合関係の第二次の編成原理のことであり、それに則して「社団国家」、「名望家国家」、「国民国家」の三カテゴリーが提起される。それは、国家を社会関係の変化にもとづけて把握するという点で新しい視点をうちだすものであり、新鮮さと示唆に富んでいる。同時に、国家構造の三カテゴリーを重商主義、産業革命、帝国主義の各段階に結びつけることによって、ヨーロッパの諸国家は同時代的に把握される。

社団国家は、「かつてデ・ファクトに「自由」をもっていた既存の諸機関に対して、その「自由」を特権として保証することを通じて自己の権威を認めさせ、また新たに形成されつつある社会的結合の場に対しても同様の扱いをすること」(八六ページ)によって成立した。要するに、王権が既存の中間団体にたいして特権を保証すること(社団的編成)によって、国家的凝集がもたらされるのである。フランスでは、王権が強くと、「貴族的価値体系が意識的に強く制度化され」(九五ページ)、そのもとでブルジョワが貴族化するのにならして、名譽革命後のイギリスでは「民間公共社会」の自律性が強く、「貴族とブルジョワの社会的混濁がまったく自生的に進行し、広汎な「中間階級」が自生的に形成された」(九五ページ)という相違はあっても、中間団体の社団的編成という点では同じだとされる。こうして、両者とも重商主義段階の国民国家、つまり社団国家として同時代的につかまれるのである。この点は名譽革命体制の評価にもかかわる。つまり、名譽革命体制のもとで、「フランスにみられるような社団機構は次第に稀薄になり」(二七一ページ)、「一八世紀に入ると、……ギルド共同

体は内部の階層分化によってほぼ解体し」(二八三ページ)しているとされる。そのうえで「第一次的な社会関係の自生的変化を阻害する諸制約がブルジョワ革命によって解消されながらも、その革命と地主貴族の近代性のために、第二次の関係である国家構造は依然として社団的原理に基づいていた」(二七一ページ)といわれる。社団国家は、制度的基礎を失いながら存続したということであろうか。この点はブルジョワ革命の評価にもかかわっており、論議をよぶところであろう。

名望家国家は、「伝統的支配の枠組が存続しつつ、それがローカルな諸利害をコンセンサスによって吸収することによってローカル社会の価値体系を管理し、他方では全国的機関の指導に参加することによって地方的利害を調整する」(三三三ページ)ことによって存立する。この意味で名望家国家は社団国家と似かよっているが、産業資本の出現という点で異なっている。つまり、貴族的価値に財力・才能という新しい価値が加わると同時に、産業資本の要請する有機的な全国的関係に照応して、支配層も地域自足的ではなく、全国的規模の機関の指導に参加するのである(二九九ページ)。また、「名望家体制とは中央権力の弱体な分権的國家において典型的にあらわれる」(三〇〇ページ)。

ところで著者によれば、フランス革命後のフランス社会、とくに七月王政は名望家国家とされる。この点にかんして評者もなんら異論はない。名望家体制を支える制限選挙制が国家構造の根幹をなしているからである。けれども、フランス革命によってギルドや領主制などの「伝統的支配の枠組」が根本的に廃止され、またジャコバン独裁が強力な中央集権体制をひき、民衆の「自律的

世界を全国的・国家的統制下におくことによつて、それを変容せしめ、民衆世界の「革命的解体」をもたらした(二六七―八ページ)ことと、この規定とはどう理論的に関係づけられるのだろうか。「革命的解体」にもかかわらず、伝統的な社会関係は存続したということであろうか。とすれば、ブルジョワによる民衆運動の嚮導の内実のより立入った分析が必要であるように思われる。社団法人にせよ、名望家國家にせよ、「國家構造」の視角は、政治革命がもたらす変革の評価の問題、さらにいえば、歴史における連続と切断の問題を提起しているのである。

さらに著者は、名望家の概念にかんじて依拠するテュデスクとは異なつて、第二帝政をも名望家國家のなかにふくめている。ポナバルト派には、民衆の名望家にたいする反感をポナバルト支持に調達する運動としての「人民的ポナバルティズム」とこの運動を秩序維持や個人的野心に利用しようとする「名望家のポナバルティズム」が存在する(二七一―ページ)。そして前者の受け皿として既存の名望家しか存在しない以上、「名望家のポナバルティズム」は不可欠の存在だったとされる。そして結論的には、「ポナバルト体制は名望家支配の外見的否定にもかかわらず、これを基礎としている」(二七四―ページ)とされる。たしかに、第二帝政の重要な一翼である県知事の大半はまえの時代からの名望家であり、政治的傾向からいってもポナバルト派が少数であったことは事実である。しかし同時に普通選挙についての見方や人民投票の導入に端的にみられるように、ルイ・ナポレオンの名望家否定は

外見的というにはあまりに強烈であり、それが彼の成功の重要な一因であった。また第二帝政のもとで、議会や県知事の権限は著るしく制限され、かつてないほど強力に中央集権化が推進された。第二帝政は、事実としては名望家に依存せざるをえなかったとしても、原理としては名望家体制を否定するものであったといふべきであろう。この点にかんじて著者は、「四八年以前においては政治的民主主義は名望家支配の敵対物であったが、今や両者が両立しうる政治形態が出現した」(三七五―ページ)という注目すべき見解を提出している。この点は、第二帝政のもとで生みだされた、國家の社会からの自立といわれる事態、すなわち強大な諸國家装置の出現と、ナショナリズムの鼓吹とのかかりで、さらに深められることを期待したい。

新しい概念をふんだんに提起し、さまざまな、対立しさえする所説を凝縮して紹介検討する本書はけつして読みやすくはないけれども、評者は、戦後歴史学のプロブレマティクをこえようとする著者のウィジョンにひきずられて、深い共感を覚えながら本書を読んだ。本書が広く読まれ、歴史認識の飛躍に寄与することを願つてやまない。(評者の事情で、執筆のおくれたことを著者と編集部におわび申しあげる。)

(B6判 四六八頁 一九八三年四月 岩波書店 二四〇〇円)

(京都大学人文科学研究所助教)